

何年かして傷病恩給の申請に必要な現認者がなかなか見付けられずにおりましたが、厚生省第二課に依頼しましたところ、香川県に真鍋氏が健在と連絡があり、何年ぶりの再会を果たし、互いの健在を喜び合いました。復員して知り得たのは、海軍百人中、この二人だけで、他の方々の消息は現段階では全く不明であります。

### 主計兵として

### 艦隊勤務と上海特別陸戦隊

石川県 島田 外治

大正十三（一九二四）年四月、石川県小松市新鍛冶町で、五人兄弟の次男として生まれる。長男は戦死した。

昭和十七（一九四二）年五月、海軍を志願、舞鶴海兵団に入団した。兵科は主計科で衣糧術を担当したが、この衣糧術では食事の調理、被服その他物品の管理、供給を習得させられた。石川県海交会会長の武部敏克氏と同期で彼は機関科であった。

舞鶴海兵団のいわゆる初年兵教育が終了して、同年八月一日、夜行列車で呉に行き、軽巡洋艦「長良」に乗艦した。

「長良」の歴史は古く、佐世保海軍工廠での起工は大正九年、進水は同十年。昭和九年ごろに改

装されてカタパルトを装備し、長年、水雷戦隊の旗艦として、太平洋戦争の開戦時には第三艦隊の主力としてフィリピン方面の作戦に参加している。

我々が乗艦した時はソロモン方面の戦局が熾烈になったところで、「長良」は昭和十七年十月の南太平洋海戦、さらに十二月の第三次ソロモン海戦に参加していた期間、即ち私の「長良」乗艦期間は昭和十七年八月十五日から十二月の初めに掛けての期間であった。

この第三次ソロモン海戦は、ガダルカナルへの第二師団の総攻撃の失敗後に、さらに増強を図った第三十八師団のために、ガダルカナル航空基地に夜間砲撃を計画した日本海軍と、米国海軍との激突した海戦であった。

この夜間砲撃は十二日、さらに十四日も強行され、激戦が展開された。日本海軍の「霧島」が集中砲撃を受けて沈没。輸送は強行されたが米空軍の攻撃により船団は全滅、第三十八師団の増援輸送作戦は失敗に終わっている。

この海戦においては戦闘配置により、通気性のない黒カッパを着て弾丸運びを行ったが、暑くて辛かった思い出がある。そして「長良」でも十人の戦死者を出し、水葬したことは忘れられない。

それで呉に寄港すると、今度は「龍田」に転属となった。この「龍田」は二代目で、大正六年、佐世保工廠で起工され、僚艦「天龍」と共に我が国の近代的最初のものであった。基準排水量は先の「長良」より小さく三、二三〇トンに過ぎないが、速力は三三ノットに達するものであった。

任務は主として字品―トラック―ポナペなど、時には歩兵第三十七連隊の兵士たち約三百人を輸送するなど、輸送の任務に従事した。

昭和十八年十二月、東京の海軍経理学校に入学、改めて特修兵として養成された。この経理学校は昭和十九年五月に卒業、今度は上海特別陸戦隊へ赴任となった。

上海特別陸戦隊は約三千人の部隊で、蘇州派遣

隊など多くの派遣隊も所属し、中には航空隊もあった。仕事は各部隊の要請、請求によって、軍需部へ請求する業務であり、毎日カバンを持って軍需部へ通う日々であった。

昭和二十年八月十五日の終戦の放送は、全員が中央広場に整列して聞き、それからは毎日書類の焼却を行った。

復員は昭和二十一年の五月一日、終戦後八カ月で、上海には多くの物資を倉庫に残してきた。上海の治安は良く、夜も外出でき、下宿していた所へも出入りできた。略奪などはなかった。

## 海軍衛生兵の勤務

石川県 三 岩 吉 次

私は、石川県石川郡鳥越村（白山市）三ツ屋町に生まれる。昭和十九（一九四四）年三月、尋常高等小学校を卒業した高等二年のとき、大津の陸軍少年飛行兵を希望、受験したが体格検査で不採用となり、昭和十九年九月、海軍を志願、昭和二十年一月、平海兵団に入団する。

平海兵団は舞鶴海兵団の收容人員が急激に増加したことに対処したもので、昭和十九年九月、舞鶴市平に舞鶴海兵団の第二海兵団として開庁した。荒地に急造の二階建てバラック兵舎八棟を建設した。

海軍特別年少兵、補充兵、応召兵などの教育、訓練を実施した。

平海兵団に入団して衛生兵を希望し、兵科が三カ月のところ二カ月の教育を、昭和二十年三月末